

特集 伊勢花菖蒲について

花菖蒲の品種や鉢栽培に関する成書としては、「牡丹花菖蒲の作り方」石井勇義 1930、「花菖蒲の作り方」池田喜兵衛 1940、「花菖蒲」平尾秀一 1959、「花菖蒲」富野耕治 1967、「花菖蒲入門」石阪晋作（平尾秀一）1973 等が挙げられる。（近年出版は省略）これらの中で戦前のものには、西田信常翁が江戸時代から蓄積された肥後花菖蒲についての知識を余すことなく語っているが、惜しいことに伊勢花菖蒲についての詳しい記述がない。また、戦後出版のものは戦前のものからの引用であるため、やはり伊勢花菖蒲に関する部分が欠落している。幸い小生の収集資料の中にこの部分を補うものがあったので、協会役員の戸塚由美子氏に頼んで現代仮名遣いにしてもらい、全文を本会報に収録することとした。それは戦前に発行されていた実際園芸誌 1932 年に「伊勢花菖蒲に就いて」と題して投稿されたものである。著者は松阪の園芸家岡村金蔵氏で、豊富な知識と情熱を持って書かれた逸品であり、内容的には西田信常翁のものとは比べても何ら遜色ない。これを見ると、従来、肥後花菖蒲は武士の花と言われてきたが、同じ武士が改良した花菖蒲でも伊勢花菖蒲

に現れた姿・形の表現は全く異なっている。江戸時代の松阪地方は、稲と綿栽培の盛んな土地で伊勢三花に共通した花卉の下垂性は、頭を垂れた稲穂（豊穰）を、伊勢花菖蒲に見られる「蜘蛛手」や伊勢撫子の花卉の切れ込みは、綿の毛羽立つ性質を髣髴とさせる。現代のデザイン学や構成学と呼ばれる分野では「日本の工芸・美術品の特徴は、その繊細性や情緒性にある。」と言われるが、伊勢三花の特性は正にその典型である。こうしたところから花菖蒲を真に理解するためには、その系統が誕生した地の風土全体を捉えて考え直して見なければならないことが分かる。

今回の特集は単なる古文献の紹介に留まらず、その内容について新たな光を当てるという意味で、戸塚由美子・松下卓生の両氏にそれぞれ別な角度からの付記をお願いした。皆様の参考となれば幸いである。

なお、本特集にご協力いただいた松阪市の岡村伸治ご夫妻、松阪市在住の当会会員である中田邦雄、森禎二の両氏及び松阪三珍花保存会の神山康夫氏等に深謝いたします。（編集委員：清水弘）

「伊勢花菖蒲に就いて」

岡村金蔵 著〔実際園芸誌 1932 年〕

I はしがき

伊勢花菖蒲とは、単に伊勢菖蒲とも称して、伊勢撫子と同様に、所謂松阪三品の一つで、古くから伊勢の松阪地方で園芸の改良を加えられ、ある少数の人々によって、愛培秘蔵されていたものである。

II 来歴

花菖蒲の原種である、野生品のノハナショウブは、我が国の至る所の山野に自生しているが、この伊勢花菖蒲がその野生種より直ちに育成改良されたのであるか、あるいはまた江戸堀切の花菖蒲、すなわち栽培種より改良作出されたものかは、今こ

で容易に確説することはできぬが、この両者の来歴をここに記述してみよう。



著者（左）と長林氏

当地方にこの伊勢花菖蒲の原種であるノハナショウブの野生品はあるが、この伊勢花菖蒲の最初の栽培者は（現在判明している範囲内で）、当時松阪殿町に住んでいた、徳川紀州藩士吉井定五郎で、この人は花卉を愛し、野生の草花を採取栽培して遂にこの伊勢花菖蒲を作り出したと伝えられている。そして、実生法を行った結果、百余種の伊勢花菖蒲を作り出し、永年これが栽培をしていたが、他へは少しも出さなかったのである。

ただ、同町の丹波屋さんにだけはその幾分かを譲って共に愛培し、後年丹波屋さんが実生作出したる「羽衣」という品種が関東花菖蒲の中へ入れられ、別の名を付けられていた事や、当地の上の庄で紫宸殿と称して栽培されているものが、吉井氏作出の「藤袴」に相違なく、その出所を尋ねるに津市よりとの事にて、これは、吉井氏が誰にも譲らなかったというものの、大名すなわち徳川紀州家あるいは藤堂家の手によりては、相当広く伝播している事で、この津市よりとの事等も藤堂家の城下だから、かく名称が異なっても、立派な種類が伝っていたのである。

この吉井定五郎氏は、今より156年前安永5年生まれで83歳にて安政6年12月に没せられたので、ちょうどこの時代は、関東花菖蒲も発達の道程にある頃で、東西この期を一にしているのである。この定五郎氏以前において、伊勢花菖蒲の存在の有無は今の処明らかにできない。

この花の二代目の栽培者は、吉井定五郎氏の嗣子吉之丞氏で、父の遺業を襲ぎ、新種の育成とその愛養に努力されたのである。三代目の栽培者として、吉之丞氏の子息幸吉氏には譲らずに、同町の野口才吉氏に譲られ、野口氏は花卉栽培の熱心家で、松阪三品の研究者として有名な方で、優良種の全部を譲り受けてその種の保存は勿論、新種の育成にも努力されて、その後たくさん優良種も作り出されたが、野口氏は、撫子を第一に愛玩されていたので、この伊勢花菖蒲の優良品以外は、相当多くの人々に譲られたのである。しかし、野口氏にはこの秘蔵の優良種を譲る嗣子がなかったので、現在この伊勢花菖蒲の優良種の持ち主、

すなわち菖蒲園主長林堅三郎氏に譲られたのである。

III 品種

伊勢花菖蒲の咲き方は一定しているとはいえ、仔細に観察すれば種々異なり、またその色彩によってたくさんな品種がある。その主なるものを列記すれば次の如くである。



大和衣



敷島



蒲城の里

花 銘	花 色
浦萱	桜
朝日蔭	時白色覆輪鉾蕊濃時色
紅小袖	紅
舞獅子	紅藤
華衣	濃桜鼠
天女冠	本紫鉾白地紫覆輪
藤代	鼠紫
舞衣	紅紫地白緋入蕊紫
須磨	薄藍
明石	極薄鼠吹上大量
桜狩	時色白覆輪
五月晴	白地淺黄砂子鉾蕊白
不知火	薄小豆色
天女舞	古代紫鉾白地藍覆輪
春雨	紫
初雪	白地水色吹上大量
東雲	極薄紅鉾極薄時色
静波	白地水色吹上大量
小式部	白地薄紅大覆輪鉾萩紅覆輪
時雨富士	白地薄水色吹上鉾
花の錦	上代紫
君が代	白地紅砂子
四海波	藍鼠白筋入鉾白紫糸覆輪
小桜威	白地紅砂子
御代の春	藤鼠鉾薄牡丹
三吉野	酔白
雲達磨	純白
褥の錦	薄牡丹紫紅紫の大筋白覆輪蕊濃紫
伊達錦	薄紅紅筋入試露覆輪
月の桂	純白
世々萱	藤紫白筋入
式部袴	老海茶
花の宴	白地藤紫吹上大量鉾紅紫覆輪
薄霞	薄藍白斑點入
花司	紅白絞淺黄筋入鉾薄色紅筋入
瀧津瀬	薄微地藍筋入鉾薄牡丹白覆輪蕊藍
五月晴	白地淺黄砂子鉾牡丹色
初日出	白地紅筋入浦紅暈鉾紅筋入蕊紅
藤の友	藤色鉾鳩羽色
東砂子	藤紫砂子
紫雲峰	紫無地鉾鼠緋入
龍田時雨	薄紅白緋入鉾極薄肉色
花嵐	紫白緋
朝日	黄白満開雪白鉾薄紫覆輪
清瀧	白地水色吹上大量鉾蕊薄牡丹色
武蔵野	濃紫
一天四海	黄白満開雪白
朝日蔭	薄紅白覆輪
雪中鶴	英鉾白地薄藍筋入蕊極薄藍色
藤波	青紺鉾蕊古代紫
敷島	桜鼠無地
白妙	雪白
橋立	薄時色鉾極薄肉色
夕空	肉色紅筋入
新天地	雪白
藤袴	藤紫
朝日空	紅紫鉾蕊薄紅紫暈
紫雲基	古代紫
乙女	極薄時色鉾白
青柳	白地藍筋入砂子鉾薄紫筋入
天津空	苦鼠
獅子怨	本紫鉾紅紫
丹頂鶴	白地藍吹上暈鉾紅紫白覆輪蕊青
蜃気楼	薄紅
面藤	紅薄牡丹絞白筋入

花 銘	花 色
真鶴	薄鼠
雪風	黄白満開雪白
剣光	水色白斑點入
銀世界	雪白
蜀江錦	白地牡丹母色絞鉾牡丹紅覆輪蕊紫
青雲	藍紫鉾紅紫
楊貴妃	時色
猩々舞	紅色鉾白地紅暈
宿鷺	白地水色吹上大量鉾蕊薄水色
衆指の萱	白地紅吹掛
薄雲	時色
勇獅子	白地藍吹掛鉾紅糸覆輪
天ヶ下	雪白
小町	紅
曙	白地紅砂子吹上暈鉾薄紅
羽衣	紫鉾蕊白地紫覆輪
東錦	肉色紅筋入蕊薄牡丹色
田子の浦	白地水色吹上大量鉾紫覆輪
伊勢の浦	紅鳩羽
花吹雪	牡丹色砂子
雲井空	藍鼠
浜千鳥	藤紫砂子鉾紫筋入紫砂子
白牡丹	純白
花車	薄藤吹上大量鉾蕊
醉美人	桃色
村雨	紫地白筋三筋入鉾白地紅紫暈
月の都	白地淺黄吹上暈砂子入鉾淺黄覆輪
桃園	肉色白緋入
筑紫湯	紫
九重錦	白紅筋紅砂子入
御幸笠	白無地鉾紫緋入
夕霧	藤紫
御国萱	濃紫
小夜衣	淺黄暈筋入水吹上鉾牡丹色大量
紅葉瀧	白紅筋入鉾紅筋蕊紅
紅葉重	紅無地鉾白紅大量
司	紫
浪千鳥	薄紫砂子鉾紫筋入紫砂子
霞ヶ浦	紫鼠絞鉾紅紫
深山の霞	薄鼠吹上暈
雪燈籠	極薄色吹上暈
大空	薄空色
紫撰集	本紫
濡烏	薄紫紺
眠鷹	白地薄紫大絞蕊薄紫
玉川	黄白
錦雲	紅紫砂子絞鉾蕊紫白覆輪
美令嬢	紫紅絞白覆輪
龍田	紅白絞
三千歳	古代紫鉾紅紫白緋入
夕晴	紅紫蕊紫
粧ひ	白地薄時大覆輪
神ノ風	白地淺黄吹掛鉾紫白緋蕊淺黄暈
隼	雪白鉾白字紫糸覆輪
猩々冠	海老茶
薄化粧	薄色紅筋鉾薄色
白鶴	雪白
夕虹	白地藍筋入子鉾薄牡丹砂三筋入
桃山	桃色白緋入
紫君子	江戸紫
狩衣	薄色
紫雲紅	薄海老茶
薄衣	白地牡丹筋入
紫式部	紫吹掛
大和衣	白地薄紫筋入鉾薄牡丹筋入

IV 栽培法

1 繁殖法

(1) 実生法

伊勢花菖蒲は新品種の育成には実生法に拠らなければならないのだが、普通の繁殖は株分法に拠る。

実生法を行うには、母本の選定から採種法を研究して、優良なる種子を得る事が肝要である。普通9月頃に種子は出来るが、この実生法を行う播期に二法あり、一法は採種直後播種する採り蒔き法で、他はその種子を翌春まで貯蔵して春の彼岸前後に播種する春蒔法である。

多年の経験より両者の結果を比較してみると、秋蒔法すなわち採り蒔き法は、発芽歩合が悪く、その発芽も遅速不齊一となる。またその発芽後、幼植物が充実しないうちに寒さが来て、降霜結氷等のため害を受け、また枯死させることとなる。しかし、かくして出来た苗は、稀には播種後2年目の6月には開花を見る事ができるものもあるが、普通は3年目でなければ開花するにいたらない。

春蒔法の場合は、発芽は一斉に、発芽歩合は良好で、その後生育も順調に進み、播種後2年目の6月には大部分花を眺められるのである。しかし、この開花は順調にいった場合のことで、中には3年目に開花するものもある。しかし、近時に至り、採り蒔き法が多く行われているので、その注意を少し述べてみると、発芽不齊一なのはその種子が冬の休眠期を経ていないため、未だ発芽の準備ができていない種子を蒔くからで、早くその準備のできている種子から順次発芽するのである。かかる種子も採種後一旦冷蔵庫に入れて後播種すれば、その発芽を一にすることができる。

また、一方の寒さの害に対しては藁あるいは枯草の類を、鉢の上に撒布しておけば、その害を免れる事ができる。殊更に温床あるいは温室に入れる程のこともない。あまり厳寒に保温が過ぎて、かえって悪い結果となることもあるが、それは取扱いいかんによるもので、もし温室で

播種を行う場合は、少々採り蒔きの時期が遅れてもよいこととなる。かくしてできた苗は、稀には一カ年早く花を見ることもでき、また、春蒔き苗と同時期に開花するものでも、その株は丈夫となり、芽もたくさん着いて、充実したる株で開花させることのできる長所がある。

播種を行うには、種子を蒴より揉み砕いて取り出し、播種用土は細かい砂7分に真土3分位の軽い土に蒔き、種子の隠れる程度に覆土し、その上に水苔を少し被い置き、時々灌水して乾かぬ様にすれば、9月に蒔いた場合、早きものは2週間位で発芽する。発芽したならば、水苔が少し位ならそのままよいが、多く被ってある場合にはそれを取り除き、その後苗が5センチ位になりたる時寒さにあうから防寒してやり、その葉は3月頃になれば枯れて直ぐ新葉とかわり、この発生した新葉が7~8センチ程に伸びた頃に、畑かあるいは5寸鉢に移植するのであるが、鉢の場合は1鉢に1本ずつ、畑へは畦幅5~60センチ、株間20センチ位に、1株1本ずつに移植する。苗が小さいからとて、2、3株一緒に植えては駄目である。このものは後花を見て良否を定めねばならぬのであるから、必ず1本植えとなすべきである。この時は丁度梅雨ではあるが、乾燥しないよう注意が必要で、後2週間目位に薄い水肥を施し、その後も甚だしき乾燥に失しないよう気をつけ、11月初旬迄に数回水肥を施す。また、中耕除草も2、3回なすべきである。11月の終わり頃に藁か枯草を株際に被って霜除けとしてやる。12月になれば地上の葉は全部枯れてしまうから、その枯葉を地上10センチ位の所から切り除いておく。その苗には寒の内に1回水肥を施し、翌春新芽が少し伸びかけた時と4月頃と花が咲き終わった頃との3回に水肥を施す。かくして播種後2、3年目には花を咲かすことができる。なお1年栽培を続けてその花の優劣を判断する。

普通2年目で開花するが、発育の悪いものは4年目でないと開花しない。しかしこの4年目でないと花の咲かないものに優良種が多い傾向

があるから、草勢の弱いものでも大切にしなければならぬ。



長林氏 実生法を示す

(2) 株分法

この株分法は、一般に行われている普通の繁殖方法で、この繁殖法によって新種の作出は望めないが、優良種の保存及び増殖にはこの方法によるのが最も簡単で、作業も容易である。

株分法を行う時期は一年中何時にてもよく、時期によりてその植物の生命に関することはない。しかし、自らその適期が存する訳であるが、遠隔の地に輸送するには 11 月より翌春発芽までがよろしい。

① 土用株分法

7 月頃すなわち花後直ちに株分けをなす方法で、これを行うには、その花菖蒲の株を掘起こし、よく土を振り落とす。その 1 株の内には、中央にある今年花の咲いたすなわち花茎の出ている親木と、葉ばかり出ている葉芽との 2 種あるが、その花茎のある親木は普通その後において芽を出さぬから、繁殖用としては葉芽を使用し、その一株に葉芽 2、3 個着くように、中央の親木を中心として株分け移植するのである。この場合葉は長くなっているから、30 センチ位先の所より切り捨て、根も古いものは切り捨て植え付ける。株分け時期は丁度暑い時であるから、移植後の管理はその他の場合に行った時より余程注意しなければならぬ。まず、植え付けた時充分灌水し、45 日間は葎簀で日被をして、水の炎熱のため煮えることを防ぎ、その後 2 週間位で薄い水肥を施す。その後の管理は、実生法の苗仕立方法と同様にすればよい。かくして翌年 1 株より 1 ないし 3 茎を出して開花

するに至る。

② 秋株分法

秋すなわち 9 月頃行う株分法で、この場合は前の土用株分法とは異なって、移植時期の気候には申し分なく、移植後の経過はよいが、株分け後の株の充実となると前者には劣るので、この株分法を行う時期は、その後の 11 月迄は発育を盛んにしていたものが、この時期より株の充実にかかるから、それを念頭に置き株分けをなすべきで、株分法は前法の如く親木を中心として、葉芽 2、3 芽ずつに切り取り移植をなす。この場合、葉は長く付いては作業をなす邪魔になるが、できるだけその葉を切り捨てずに、そのまま植え付けた方が結果はよい。しかし、葉を切らなければ作業のできぬ場合には仕方ないから、なるべく長く残すように切る。植え付け後は灌水に注意し、時々薄い水肥を与えて、株の充実を図り、かくして前法同様翌年の開花に備えるのである。

③ 冬期株分法

冬期すなわち花菖蒲の休眠期の株分法で、作業が一番容易にしてその行う時期も長く、11 月より 3 月迄の間に行えばよいのだが、しかし厳寒の候だけは避けた方がよい。鉢植えとする時は、充実した株を 2、3 芽付いているよに分けて植え、花壇植えの場合も同様に株分けし植え付けたならば、寒さと過乾を防ぐ目的で、藁あるいは落葉枯草の類を少し厚く覆っておく。厚く覆った場合、発芽前にはその覆いを取り除かねばならぬ。この方法にても前同様 6 月には花を見ることが出来る。しかし移植してより開花迄の期間が長い程良花を咲かすことができるのは勿論である。

(3) 芽分法

前法株分法の一つではあるが、操作を少し異にするが故に、この名を付けたのである。この芽分法の時期は、7 月頃、謝花後直ちに行うことは前法土用株分法と同様であるが、その分割に際し、前法は 1 株 2、3 芽ずつになすに対し、本法は 1 株 1 芽ずつに分割植え付けする。その理由は、花

菖蒲の性質として、翌年開花するものは、1株中本年開花せし芽すなわち親木の両方の各1芽ずつ（俗に兄芽と云っている）都合2芽だけであって、その次々とたくさんに葉芽すなわち弟芽があっても兄芽以外のものは開花せぬのが普通である。故に前法の如く、1株2、3芽ずつに分植する時は、普通は1株1芽のみ翌年花を着けるわけである。しかるに、本法芽分法を行って苗を作れば、いかなる貧弱な弟芽にても、その各株に翌年は全部に必ず花をつける特徴がある。それ故、この伊勢花菖蒲の既存品種の繁殖は本法を最善の方法として、昔より実行しているのである。

まず、本法を行うには謝花後鉢より株を抜き土を振り落とし、その株の葉芽全部を1株1芽ずつに小刀で切り離し、その1芽ずつには大抵根が出ているから、そのまま分植すべきであるが、その方法は、中心の短い心葉を標準として、それより両方に順々に短く丁度鉞先形に切り捨てて、倒れぬ程度に浅く植え付けをなす。この時期は暑いから、そのまま日光に当てる時は暑さのため苗を傷める憂いがあるが、故に1週間位は葭簀を掛けることや、灌水、施肥等は前法と同様である。

この場合、芽分して根のない芽ができることがあるが、その時そのままにて植える時は枯死してしまうが、その無根の芽を捨てずに「発芽法」を施して繁殖に供すべきである。その方法は川砂を盛れる鉢にその無根の芽を挿し、水を湛えておけば直き発根するものである。その根の充分茂った頃、普通の芽分法と同様植え付け肥培せば、普通の初めより根のあった株と少しも変わらず、翌年立派に花を着けるものである。

かくして、繁殖し培養したるものは、その開花期には、この花芽、すなわち親木の横には、普通にて葉芽が二対すなわち4芽、肥培よろしき時は三対すなわち6芽できるのである。しかし、全くでないもの、1芽のもの3芽のもの、あるいは三対以上のもの等稀には例外もある。この芽は、また本法を繰り返して、開化に備えるのである。

(4) 親木吹芽法

前述の如く、この花菖蒲は、花を着けた親木に

は翌年花を着けぬには勿論、その芽からは葉芽も出さぬのが普通である。故に前述の繁殖法を行う場合も、この親木は使用せずに捨ててしまったのであるが、もし他に葉芽の無き場合とか、珍重な種類の増殖には、その捨てるべき親木を謝花後周到なる手入れと充分の施肥により芽を吹かして繁殖する方法がある。この方法は芽の無い親木でもどこかに俗にアタリと称して芽皺があるから、そのところより発芽する性質があるので、このものを注意して適度に湿気を保って（過湿は腐敗の憂いあり）おけば、暫時にして発芽をみるから、その時より肥料を施す。その肥料も直接その芽に当っては害があるから、株より少し隔てて周囲に円をえがいて施すようにする。かくしてその後も度々肥料を施し、手入れと施肥を十分にすれば、その芽は親木の両方へ各1芽ずつ出て、普通のものよりも施肥多き関係で、その後旺盛なる生育をなし、開花の頃には花も他の方法で繁殖したるものに比べ美大なる傾向がある。この芽が2芽以上も出る事があるが、その時は2芽を残して他は摘芽すべきで、もしそのままとなす時は、花が抜けると称し、翌年の開花を休む事がある。また2芽できた場合は、その芽の充分生長した9月頃に、小刀で親木を2つに割って2株とした方が成績がよい。なお1芽だけの場合にても、その芽の充分生長したる頃、その親木を切り離す方がよいのである。

2 培養土

すべての花卉の本性を充分発揮せしめて、その美を楽しむに、誰しもが一番苦心するのはやはりこの栽培用土の種類である。この伊勢花菖蒲の栽培に当りても、この定例に漏れず、色々と工夫されているが、当地で昔から愛用している用土は、黒ボク（腐植土）5分、川砂3分、ニコ土（沖積細土）2分の割合に混合して用いる。この黒ボクを使用するのは、軽い肥料気のない新しい土を得るのが目的で、畑の土を使用せずに山より堀採り使用している。またニコ土の無い場合は、黒ボクを7分にすればよい。かく混合したる肥料気の少

ない用土に、無肥料で前述繁殖法のいずれかの方法で植え付けるのである。鉢は、温室鉢あるいは駄温鉢なら6寸鉢で、駄鉢なら7寸鉢を用いる。もし切花用あるいは花壇で眺めるための栽培には、特別に栽培用土を作らなくても、普通の畑地で十分に栽培することができる。野生品は稍湿地に自生しているから、湿地あるいは水田で栽培せねばならぬと思われるが、この花菖蒲は絶えず水に浸っていることは禁物で、かえって畑地の方が成績がよい。

3 植付法

この植付方法は前に繁殖法のところで大方述べてはあるが、今鉢植方法として申せば、前記6、7寸の鉢にまず底石を入れ、その次に排水用また通気用として大豆位の大きさの川砂を2握り位入れ、その上に前述培用土を詰めて、1鉢1株ずつなるべく倒れない程度に浅く植えるのである。普通の花菖蒲を鉢植えとなす時は、鉢は1尺ないし1尺5寸位の大きい鉢を用い、5、6芽を持つ株を1鉢に3株ずつ、「品」字形に植え込むのであるが、この伊勢花菖蒲は古来1鉢1株主義である。またその鉢も縁の無い上下同直径の素焼きのものを特に作りて、それで栽培したのである。植え終われば、充分灌水なし、普通土用芽分法によって植え付けるから、炎暑のため水が煮えて根を傷めぬ様、1週間位は葭簀で日覆をするか、あるいは日陰に置く等、前述の通りになす。

露地植えとなす場合は、1株1芽分芽法によるか、あるいは1株2、3芽の分株法によるかして、植え込み期は7月頃または秋彼岸頃か、あるいは3月頃迄のいずれかを選ぶべきであるが、やはり成績のよいのは土用頃植え付けるのに限る。植え付けるには、まず花壇を耕起し、丁寧に整地して、株間20センチ畦幅30センチ位の間隔にする。7月頃植え付けるものは分芽法により、その他の場合においては、1株2、3芽ずつの分株法により、なるべく浅く植え付けることは、いずれの場合にも同じで、その後の注意等も前述の如くである。かくして、毎年植え替えをなし、古株あるいは古

い根を除いて植えるから、年々旺盛なる発育をなし、美大なる花を咲かすことができる。

4 肥料及施肥方法

この伊勢花菖蒲に用いる肥料は、いかなるものでも差支え無きも、速効性の肥料が適当であるから、前もって乾燥肥土と水肥とを用意しておけば便利である。乾燥肥土を作る配合割合は、容量で示せば、菜種油粕7、米糠2、草木灰1、腐葉土または堆肥10、または、鯨搾粕6、米糠2、草木灰2、腐葉土10、以上いずれかの割合にて混合なし、適宜水を加えて配合堆積しておく。その後そのままとしておく時は、腐熟醗酵を起し高温を發して、養分の飛散と腐熟の不齊一を示す故に、時々攪拌して充分醗酵腐熟せしめ、かくすれば始めは混合せし水分も高温に逢い、為に乾燥して最後の出来上がった時は品温は常温となり、能く腐熟したる乾燥状態の肥土が得られる。このものは箱または適宜の容器に詰めておき、必要に応じて取り出し使用すべきである。また水肥を作るには、水10に対して油粕2、草木灰1の割合に混合なし、よく攪拌して始め腐熟するまでは、粕類が浮き上がってくるが、よく腐熟してしまえば、粕類は全部下に沈み、上には上澄み液が出来て、なおその上には薄き幕を張る。かくの如き徴候を示せば、よく腐熟しているのであるから、使用することができる。この場合の水は、米研水を用いればなおさらよい。以前は、この伊勢花菖蒲には寒肥として、正月にはお餅を搗くからたくさんの米研水ができるため、その水に人尿を極少し加えて必ず施した位である。また前記水肥の代わりに米研水と人尿を配合しておいても結構である。この米研水の効用は、寒中施す場合はその幾分含まれている糠分の醗酵作用が土を温め、すなわち保温作用となりて、その後の結果がよいといわれている。しかし、このものを夏期施す時は、その醗酵作用が禍となり根を傷める結果となるから注意すべきで、このものも他の肥料と同じくよく腐熟せしめ使用すれば、いかなる時期においても差支えない。

施肥の方法は植え付け後の伊勢花菖蒲が充分活着したならば、度々前記水肥を4、5培以上に薄めて施さねばならぬ。まず植え付け後2週間位にした施し、その後11月迄は月に2回あるいは3回ずつ薄き水肥と乾燥肥土も一掴みずつ施し、なお寒中には1回前述の目的で施し、3月末よりまた薄き水肥を10日おき位に施し、止肥は留葉すなわち蕾の抽出を見て施す。この場合乾燥肥土を二掴み程与え、なおその上に少し増土しておく。しかし、この後の施肥や、あまり肥過ぎた場合は、花がすくんで本来の美大なのんびりとした花とならぬことがあるから、肥過ぎよりはむしろ肥料が不足の方が安全である。しかし、止肥後において肥切れの場合は、極薄き水肥であれば少し位施しても差支えなく、かえって良花を咲かすことができる場合もある。

5 管理法

(1) 置き場所

普通伊勢花菖蒲は鉢植えとなすが、その置き場所としては、よく日光の当たる、風通しのよい、管理に便利な所が適当である。

(2) 灌水

植え付け後、灌水に注意し、夏期によく乾燥する暑い時は、1日2回も灌水せねばならないこともあるが、大抵1日1回の灌水で結構で、それに用いる水は汲み置きの日向水が理想である。生育中は上の如く灌水するも、地上の葉が黄変し枯れかけるようになれば、あまり灌水の必要もないのでむしろ過湿が害となる。故に冬期は、自然のままに灌水の必要なきも、晴天の続く時は、1週間に1回位は気を付けて土の乾いているものには灌水すべきで、この時でも土の湿っている鉢には灌水してはならない。しかし、この冬期にあまり乾燥しすぎると、根が上るといって、根を傷めて開花に影響を及ぼすこととなるから注意が肝要である。その後、春になり芽が伸び出したら、1日1回は灌水が必要となり、開花前より開花中は水切れのせぬよう注意し、1日何回でも灌水せねばならない。なお、花壇植えの場合は、乾燥甚

だしい時以外に灌水の必要がない。

(3) その他の手入れ

植え付け後充分に生長し発育の完全なる場合は初め鉢に真直ぐに植え付けた葉が45度位までも傾斜して、勢いよく葉を伸ばしている。これは丈夫な根がたくさん出て旺盛な発育をなしたる証拠で、このように出来ていれば、翌年美大な花を咲かすことは問題ないといえる。

その後、病虫害の防除にも、また雑草の防除にも注意し、大抵の年は11月下旬、年により冬暖かな時は12月中旬頃になると、地上の葉は全部枯れてしまうから、この時地上10センチ程の所よりその枯葉を剪除して、その後の管理は前述のように相当乾燥状態に保ち置くのである。

また、降霜甚だしくなり、夜の寒さ厳しき頃となれば、夕方より朝までの間、菰の類で覆って置き、防寒設備しておく方が、春になってから葉が一斉に発するので総ての作業に好都合である。この覆いは寒い日は日中も取らずにそのままにし、暖かい日にのみ取り除いて日光に当てればよい。

こうして春芽を発生し出したならば防寒の必要もなく、日々の灌水の量を増し、前述のように止肥を施した場合は、降雨或いは灌水等のため鉢内の培養土は幾分減少しているから、新しい用土で増し土をなす。

そして、その後特に葉の伸び過ぎを現わすものは、その徒長を抑制せねば、草勢が乱れて観賞の場合に都合が悪いから、この徒長性を有する葉のその部分に木綿針を2、3回打ち込み、この伸び過ぎを防ぐ事ができる。その他病虫害にも注意し、立派な花を眺めるよう心掛けると同時に、葉も美しく立派に作るが必要で、花と葉との調和を得て初めて完全なる花を得ることが出来るのである。伊勢花菖蒲はその特徴の所でも記した通り、開花の場合は、花のある位置まで葉が伸びているか、あるいは1、2葉、花より少し伸びているものがある位にならなくてはならぬ。

6 病虫害

病害として大して被害を認めざるも、稀に赤渋病、小銹病等に冒されることがある。これらの発病原因は排水及び通気不良、窒素質肥料の過多等にあれば、その灌水法及び施肥量に注意し、発病前に三斗式ボルドウ液又は銅石鹼液等の撒布は有効である。また被害部は摘み取り焼却して病原菌の絶滅の心掛けるべきである。

害虫として主なものは、地下部を害するものにコガネムシの幼虫があり、地上部を害するものにはヨトウムシ、アオムシがある。このコガネムシは地下に産卵して孵化後はいかなる植物でも害するが、特にこの花菖蒲の地下部は好んで食害し一番困る害虫で、この幼虫はスクモムシと称して地中に棲息しているため、薬剤にて駆除することは困難にて、捕殺する外良法はない。まず土中に棲息していることを見分けるには、鉢に水が湛えられている時、よく注意して観察すれば、土の所々より小さな泡をプックと出す所があったならば、そこを丁寧に探せば極小さい小米大の該虫を見つけ出すことができ、新しい用土と取り替えてやる。また培養土に腐葉土または堆肥を用いぬのは、この虫の予防法ともなるので、もしその腐葉土を使用せば該虫の被害甚だしいものである。

ヨトウムシもやはり幼虫が加害する。被害部は地上部で中でも花蕾の被害が甚だしい。少し知らずにいる間に、苞の一部に穴をあけ、そこより内部に潜入し苞の蕾を全部食害してしまうことがある。また蕾の外葉または茎も食害するからよく注意すべきである。この虫は名の如く日中は土中あるいは鉢裏に隠れていて、夜中出て食害するから、毒剤撒布または食物誘殺法も有効であるが、夜間明かりを付け該虫捕殺は容易で、確実に駆除ができる。

7 観賞法

伊勢花菖蒲は6月になれば、次第に花茎を抜き出し、紫、白、紅と艶を争い美を競うようになるから、ここに於いて一年間の丹精が報いられる。このように開花し始めれば、普通鉢栽培としてあるから、鉢を綺麗に洗って屋内に取り入れ、鉢一

つずつにても観賞できるが、数多き場合は花壇を設けて観賞する。この場合後方に満幕を張るか竹簀を張り、あるいは屏風を立て、その前に丈の高いものを後に順序よく並べ、その前に葎かあるいはハギで作った高さ 30、40 センチ程の目隠しを置いて眺めるのである。この場合色どりを考え同色のものはなるべく一緒にならぬように注意する。

一花の開花期間は3日で、開花第二日目すなわち中の日が一番見頃なのである。この花の色も普通の人々は、紫、白、浅黄と簡単に片付けてしまうが、それはこの花のため誠に可哀相で、一概に紫と呼ぶ中にも種々の変化があつて、よく比較してみれば品種の所で花銘の説明をしてある通りであるから、色彩も仔細に観賞して引き立つ様に陳列して貰いたい。花が終われば次々と咲き出すものと取り換え観賞するから、一花3日間にも相当長く観賞することができる。またこの花は一茎に必ず二花を着けるので昔からメオト花と称している。この二花は一度に開かず一花が咲き終わった後他の一花が咲き出すので、都合一茎すなわち一株で6日間観賞できるので、昔より六日のアヤメの言葉がある。また稀には一茎三花咲くものがある。これを前のメオト花に対してメカケ花と称して、夫婦以外に妾も連れているとて、余り喜ばれない。しかして花の大きさも三花着けた場合は少しは劣るものである。

この花の観賞に際して最も注意しなければならぬことは、前述の伊勢花菖蒲の特徴をよく現わすことで、また葉及び花にも表裏があつて、大抵葉と花の表裏は一致しているから、その表の方を観賞できるように配列する。中には花と葉の一致していないものもあるから、しかる場合は仕方ないから花の方を前にして観賞すればよい。

なお実生から開花したものは、第一年目の開花では、その優劣が決定しないのが普通であるから、なお一年栽培して二年目の花を見て初めて、優劣を決定する。また花壇植えとして観賞する場合は、栽培当時から花期の早晚、その花色の配合等よく考えて植え付け置くことが必要である。花が終わ

れば採種用以外のものは花の部分丈切り取り、結実を防いでおく。この時茎を下部より切り取ることは、株の勢力を削ぐことになるからである。

切花用として栽培した時は、この花の開化期は短いので、開花前日位のものを探らなければ、生花として観賞期間が短くなる。

8 採種法

伊勢花菖蒲の種子を採るには、新種育成の目的がある場合で、採種は新種育成の第一歩で、普通は自然に結実したものを採種して播種するが、これでは優良種の歩合も少なく、育種に多数を取扱わねばならないから不便である。当地では昔から親木と称して多年の経験でそのその変化性に富んだものを母本として採種した武蔵野、猩々の舞等がその例である。近時学術の進歩に伴い遺伝学の応用による、採種方が行われるようになったから、新種の育成にはぜひ遺伝学の素養が必要で、例えばこの伊勢花菖蒲の花の色は野生種の有する紫に近い色程他の色に対して優性である。ゆえに今桜色で優良なものを得ようと思えば、少なくとも色に於いては桜色の品種に自花受粉せしむるか、あるいは他の桜色の品種と交雑せしめなければならない。これは単純な説明で桜色以外の品種を用いても絶対できないとは云えぬが、それはこの桜色を現わすべき性質を持っていても外部に現わさぬ雑種性のものがあって、その隠れている性質が現れることがあるからである。

採種するにはまず採種しようと思う品種を定める。すなわち、花の色及び形について、かかるものを得たしと理想を貫き、その考えになるべく近い品種を選ぶ。かく品種が定まれば、そのものより採種するのであるが、その方法に二通りあって、一つはその花の品種に自花受粉せしむる、すなわちその花の雌雄の受粉による結実法で、他は二品種の交配による雑種法である。

9 自花受粉による採種法

この方法を行うには、その親木となるべき品種は雑種性のものでなければ新品種はできないが、

しかし普通の栽培品は全部雑種性のものばかりで、純粋なものは無いといってよい程度だから心配ない。この作業をするには開花の前日に、花蓋を取り去ってこれにパラフィン紙の袋を掛け、その袋にはガーデンペンシル等でその日を記しておく。翌々日すなわち開花第二日目にその袋を外して、ピンセットで雄蕊の蕊を挟んで花粉を柱頭に付け、作業が終われば又その袋を掛けておく。この場合自花受粉せしめたることをその袋かあるいは別の札に記して、札ならば落ちないように完全に付けておく。もし、何かの場合でこの受粉作業が一日遅れても有効であるが、なお一日経過する時は、最早その能力が無くなるから注意すべきである。

10 他花受粉による採種法

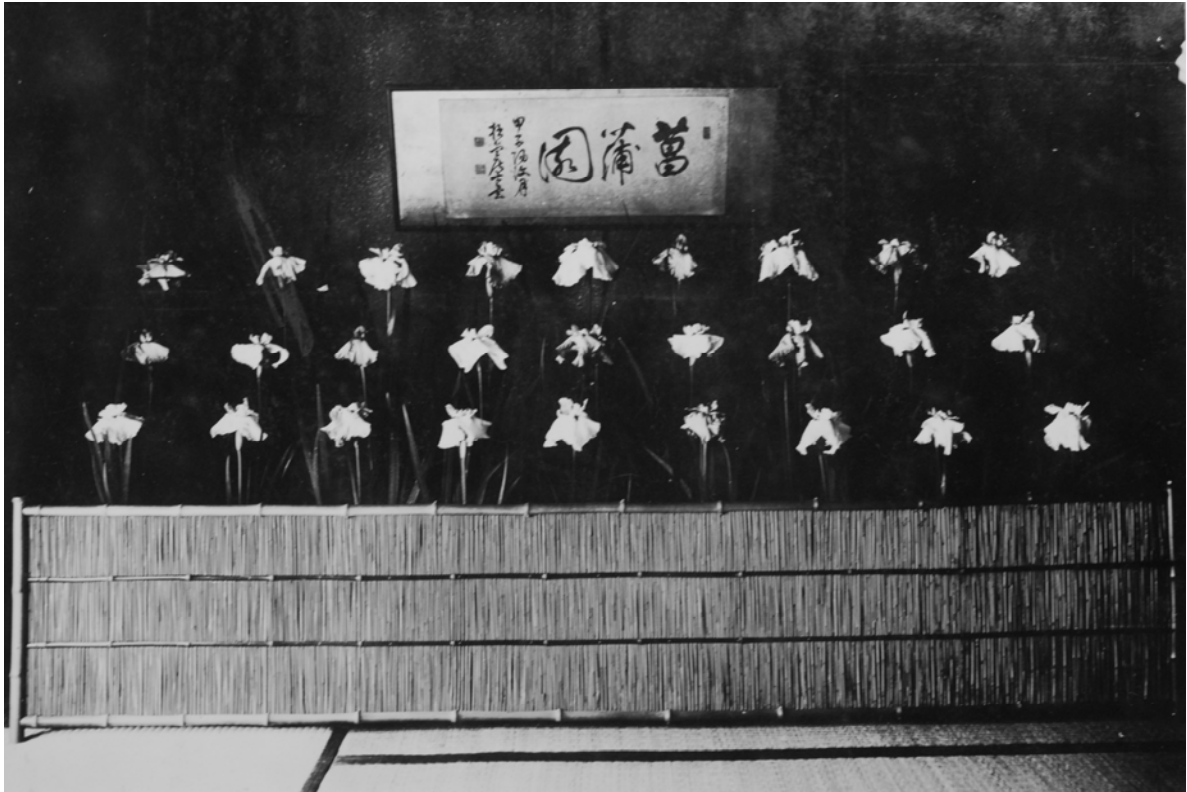
雑交を行うには、母本と定めた品種の開花前日に、花蓋も雄蕊も共に採り除いて日付の記入してある袋を掛ける。一方父木となるべき品種も同じく開花の前日に花蓋丈を取り除いて袋を掛けておく。それより三日目すなわち開花二日目にピンセットにて父木の葯を挟んで、母本の柱頭に付着せしめ、その母本に袋を掛け同時にその両親の品種名と交配月日をも記した札を付けておき、種子採種には蒴と共にこの札も袋に入れておくのである。この作業中、花柱は三個ありて中一個位折れても差支えないから、他の二個に花粉を付ければよい。なおこの伊勢花菖蒲は一茎に二花または三花を着け、上部のものも開花後下部のものも開花することは前述の通りで、この場合一茎の内一花を使用する場合は、必ず他の花は採り除いておくことで、しからざれば、後日第二花が開いて自然結実をなし、種子採種にあたり間違いとなる恐れがあるから注意を要する。

こうして9月頃に至れば実は成熟するから、蒴が枯れかかったならば、裂開しない内に採集しなければならない。自花受粉せしめた場合は、蒴と共にその親株の品種名を記した札を忘れずに袋に入れておく。乾燥後種子を調製し、採り蒔きの場合は直ちに播種し、張る蒔きとする時は、それ

まで諸種の害を受けないよう貯蔵しておくのである。

今回は、隠れたる花卉伊勢花菖蒲のためペンを執ったので、これにて前回の伊勢撫子とともに松

阪三品の内二品は不備ながら記したから、後一つの伊勢菊、否松阪菊に関しては不日筆をとることにする。



花壇による室内観賞(長林氏培養)



蒲管



伊勢菖蒲

写真は、岡村金蔵氏のご子息、岡村伸治様のご提供によるものです。

貴重な写真の掲載にご協力いただきました皆様に、厚くお礼申し上げます。